

千葉市内出土の堀之内 2 式土器の集成研究

小澤 政彦（千葉県教育庁教育振興部文化財課）

1 はじめに

千葉県内における縄文時代後期前半の土器研究は、主として堀之内 1 式の研究が盛んに行われ、堀之内 2 式については低調であったといえよう。これは堀之内 1 式に比べ、2 式の資料蓄積が中々進まなかったことが背景にあったと考えられる（註 1）。

堀之内 2 式の様相の検討は、後に続く加曽利 B 式土器の成立や、「精製、粗製の分化」といった土器製作システムの変化、後期集落の様相を考えていく上で重要である。そこで本稿ではその端緒として、千葉市内の遺跡から出土した堀之内 2 式土器の集成を行った上で、若干の考察を行いたい。

本稿執筆の契機となったのは、東海縄文研究会におけるシンポジウム「東海からみた後期前葉土器群」である。新型コロナウイルス感染症の蔓延のため、2020 年は開催されなかったが、シンポジウム開催の折には、本稿を踏まえた上で、千葉県内の後期前半の土器について、発表する予定でもあることを申し添えておく。

2 資料の集成の方法

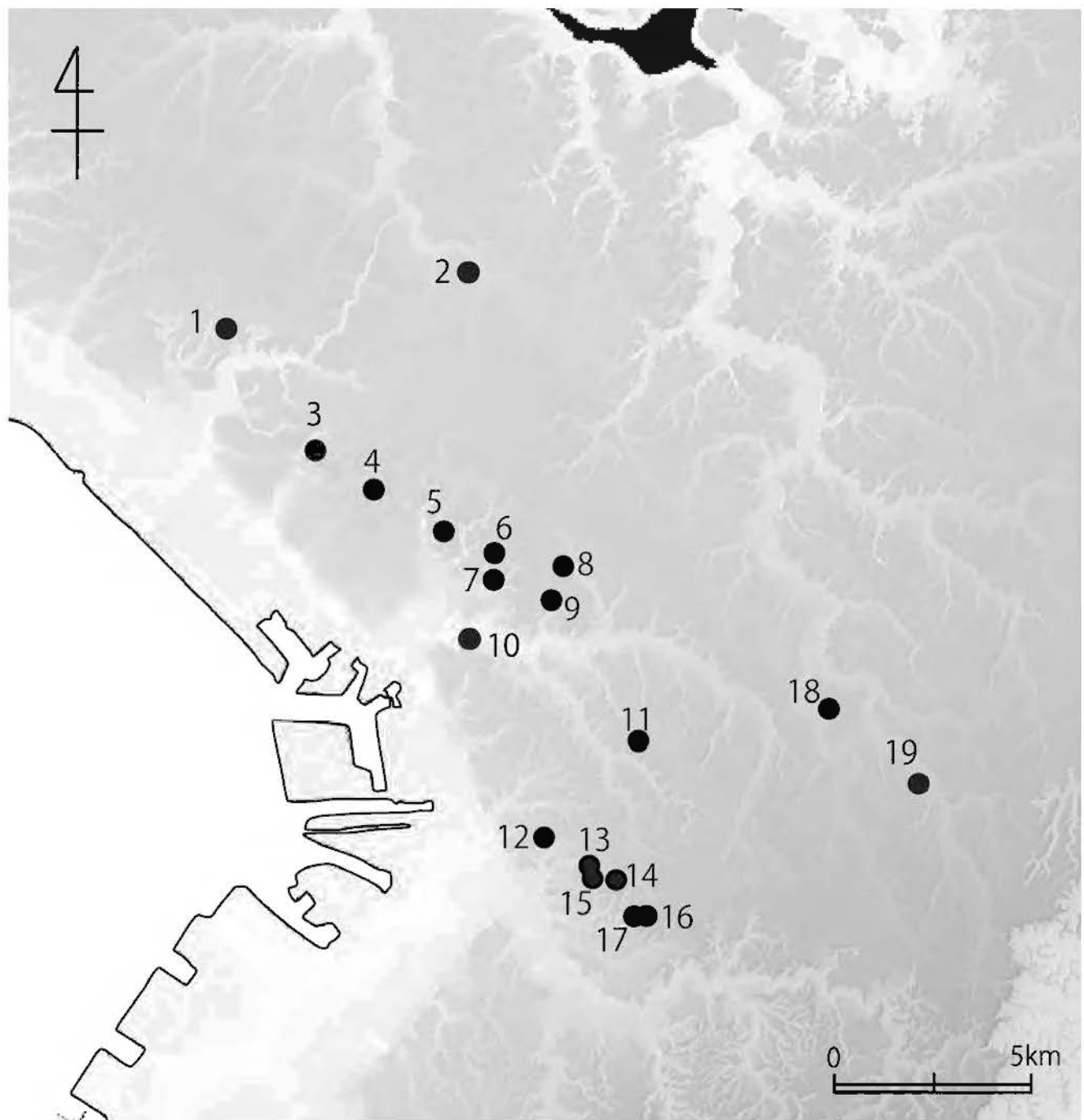
千葉市内に所在する堀之内 2 式土器が出土した遺跡を対象に資料の集成を行った。集成の方法は、刊行されている千葉市内の遺跡の発掘調査報告書を悉皆的に調査する方法を取った。また一部、資料報告等で提示された資料も集成した。集成の結果、19 遺跡から出土していることを確認した。

この結果を基に、集成表（第 1 表）と分布図（第 1 図）を作成した。集成表の遺跡番号は、分布図の番号と対応する。また文献番号は、文献集成表（第 2 表）の番号と対応し、その文献に記された遺構名等と、その内容を示した。なお堀之内 2 式土器については、研究者によって様々な編年案が示されているが、本稿では石井寛が示した編年案（石井 1984、1995）を参考にした。第 1 表中では、2a ～ 2e 式の 5 細分、注口土器、大内千年が呼称を与えた堀之内 1 式土器の様相を強く残す「伊篠白幡Ⅳ群 10 類型」（大内 2002）と項目を分けて、出土が認められたところに「○」を付すことで示した。

3 分布の検討

分布図（第 1 図）と集成表（第 1 表）から分布の傾向について読み取っていきたい。東京湾に面した台地の谷奥部に立地する遺跡が多く、東京湾沿いでは南北に連なるように遺跡が分布する。東京湾からやや離れた台地の奥では現状、遺跡が少ない。

ただし遺跡の内容を見てみると、東京湾岸からやや離れた位置に所在する内野第 1 遺跡（2）で、最も多くの当該期の遺構、遺物が検出されている点は注意しておきたい。またこの遺跡では 2a 式から 2e 式に至るまでのすべての時期の土器が出土している。東京湾に面する台地に立地する遺跡で、遺構、遺物の検出数が多く、2 式の全時期にかけて土器の出土が認められるのは、加曽利貝塚（8）、矢作貝塚（10）、木戸作貝塚（13）、大膳野南貝塚（17）である。それ以外の遺跡は、出土数も少なく、時期も限定的である。



第 1 図 千葉市内における堀之内 2 式土器出土遺跡の分布図（カシミール 3D を使用）

この傾向は、現状における評価であり、出土数が少ないとした遺跡においても、今後発掘調査が行われれば、評価が変わる可能性があることには留意しておきたい。

4 型式学的検討

集成した土器について、石井編年（石井 1984）を参考に説明を行う。

(1) 堀之内 2a 式（第 2 図上段）

堀之内 2 式の成立について、先行研究から文様帯上下端区画の発展（鈴木 1982、石井 1984、1995）と「器面の画一化」（石井 1984：P2）が特徴として挙げられる（註 2）。1、2 は下端区画が存在しない堀之内 1

式土器の様相を強く残すものである。石井の堀之内1式の分類(石井1993)でE群土器の系譜と考えられ、沈線による懸垂文と楕円文、斜行文等が組み合わされた文様が施される。1は引かれる沈線が多くなっており、そのために従来の文様構成が崩れている。2は従来の構成の簡略化と1式で特徴的であった縦位構成が形骸化し、器面の画一化に向かっている様相が見て取れる。1、2は一見、堀之内1式であるが、以上のような特徴から時期的に下っているものと考えられ、堀之内2a式と捉えておきたい。3～5、7、8は堀之内2式の深鉢に特徴的な朝顔形の器形である。3、5は文様帯下端区画を持ち、円形文、渦巻文が施される。4、7、8は沈線で三角形や菱形の幾何学文が施される。8は文様帯下端区画を持つが、7は明確な下端区画を持たない。4は欠損のため不明である。4、8は器面の画一化が認められるが、7は懸垂文による縦位構成が一部残っている。このため縦長の三角形の文様が施されている。6は下端区画を持つが堀之内1式の可能性もある。9は、鉢形土器で縄文と沈線による文様が施されている。帯縄文での表現にはなっていない。

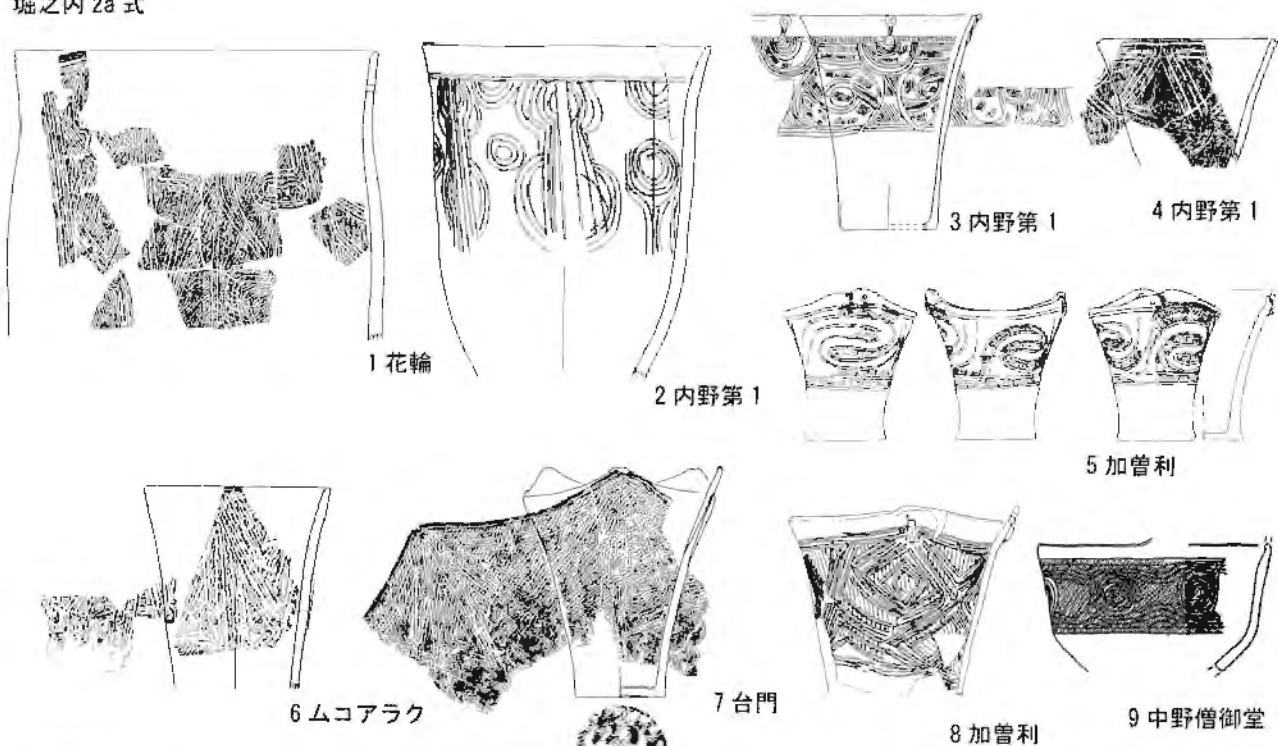
(2) 堀之内2b式(第2図下段)

堀之内2b式について、石井は「充填縄文手法の普遍化」(石井1984:P2)、2a式に比べ「文様の整理」(石井1984:P2)が進むが、広い空白部を残さないように多重沈線等を施文することを特徴として挙げている(石井1984)。10、11は帯縄文により楕円文が施されるものである。堀之内2a式の可能性もある。12はくびれ部で口縁部と胴部が区画され、胴部に帯縄文による渦巻文が施される。渦巻文間には斜行文が施されている。こうした文様構成は南西関東に多く見られる金魚鉢形の器形を持つ土器群(石井のC群土器(石井1993))の影響と考えられる。13～16は石井が「斜行文」(石井1984)と呼称したもので、帯縄文による縦位の懸垂文と斜行文が施される。堀之内1式の特徴である縦位構成の名残を残しながら、帯縄文化したものと捉えられる。17～22は幾何学文が施されるものであり、堀之内2b式期に最も典型的なものである。出土する個体数も1番多い。17、19、20、22は、石井が「菱形文」(石井1984:P18)と呼称したもので、帯縄文で三角形と菱形の文様が施される。17は菱形文の中にさらに入子状に菱形文が施される。20、22は多重沈線が施される。19は、ほかの個体と異なり、菱形文が多く施される。18・21は、石井が「三角文」(石井1984:P13)と呼称したもので、帯縄文で三角形の文様を横位に展開させるものである。18は口縁部に2重の連鎖状隆線が施され、胴部には帯縄文による縦長の三角文が施される。連鎖状隆線が多条化するの堀之内2式後半に多く認められる様相(石井1984)であるが、2b式にも存在することをこの個体は示している。21は、文様帯がやや狭くなっているが、三角文の中に入子上に三角文が施されている。

(3) 堀之内2c式(第3図上段)

堀之内2c式について、石井は、2b式に比べ「文様帯が狭められる」点と、「文様の整理」が進むことを特徴として挙げている(石井1984)。1～3は朝顔形深鉢とは異なる器形のものである。これらは石井の分類(石井1993)でC群、D群とされたものの影響が強いもので、口縁部から頸部にかけて無文で、胴部に帯縄文による文様が施される。このような土器は、2c式期によく見られるようになる。1、2は渦巻文とそれをつなぐように副文様が施される。3は三角文が施される。いずれも文様帯が狭くなり、文様の空白部が目立つようになっている。4～10は朝顔形深鉢に文様が施されるものである。4～6は、石

堀之内 2a 式

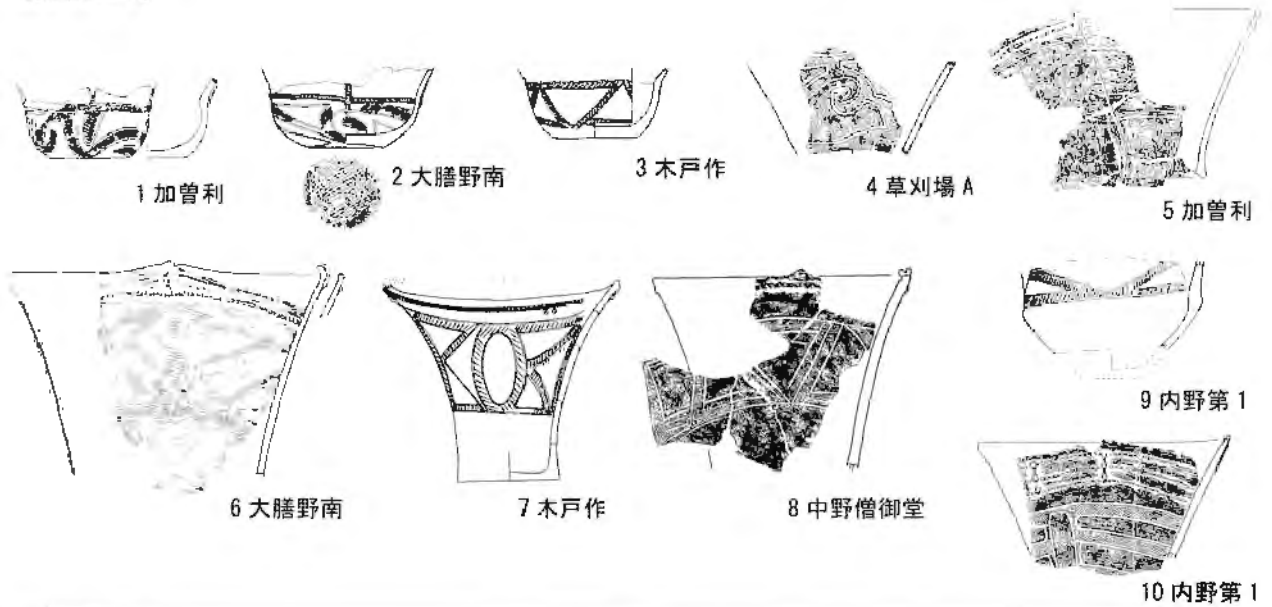


堀之内 2b 式

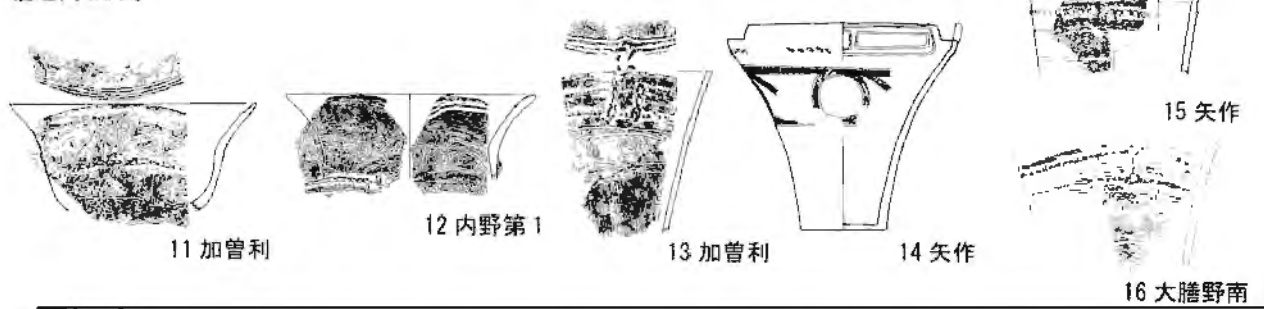


第 2 図 千葉市内で出土した堀之内 2a ~ 2b 式土器 (縮尺不同)

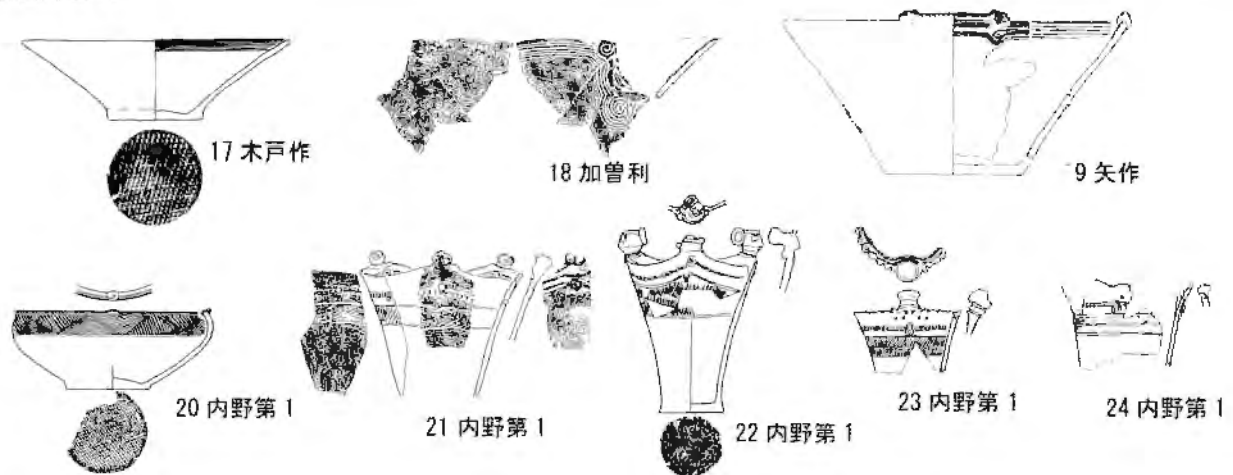
堀之内 2c 式



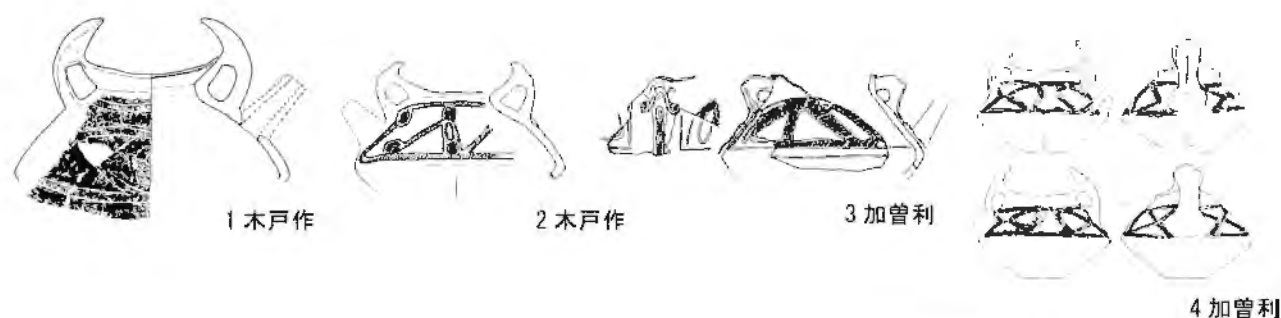
堀之内 2d 式



堀之内 2e 式



第 3 図 千葉市内で出土した堀之内 2c 式～ 2e 式土器（縮尺不同）



第 4 図 千葉市内で出土した堀之内 2 式の注口土器（縮尺不同）

井が「渦巻文」（石井 1984：P19）と呼称したものである。渦巻文とそれらをつなぐように帯縄文が施される。7 は石井が「対弧文」（石井 1985：P10）と呼称したものである。弧状の文様が対となって、円形を呈した文様が施される。8、9 は幾何学文が施されるものである。2b 式（第 2 図 17～21）に比べ、文様帯が狭まり、多段化したものが認められなくなる。8、9 は三角文が施されるが、文様内に多重沈線等は施されなくなり（文様の整理）、空白部分が目立つようになる。10 は石井が「杵状文」（石井 1984：P19）と呼称したものと考える。帯縄文による杵状の区画文が施される。堀之内 2d 式に下る可能性がある。

(4) 堀之内 2d 式（第 3 図中段）

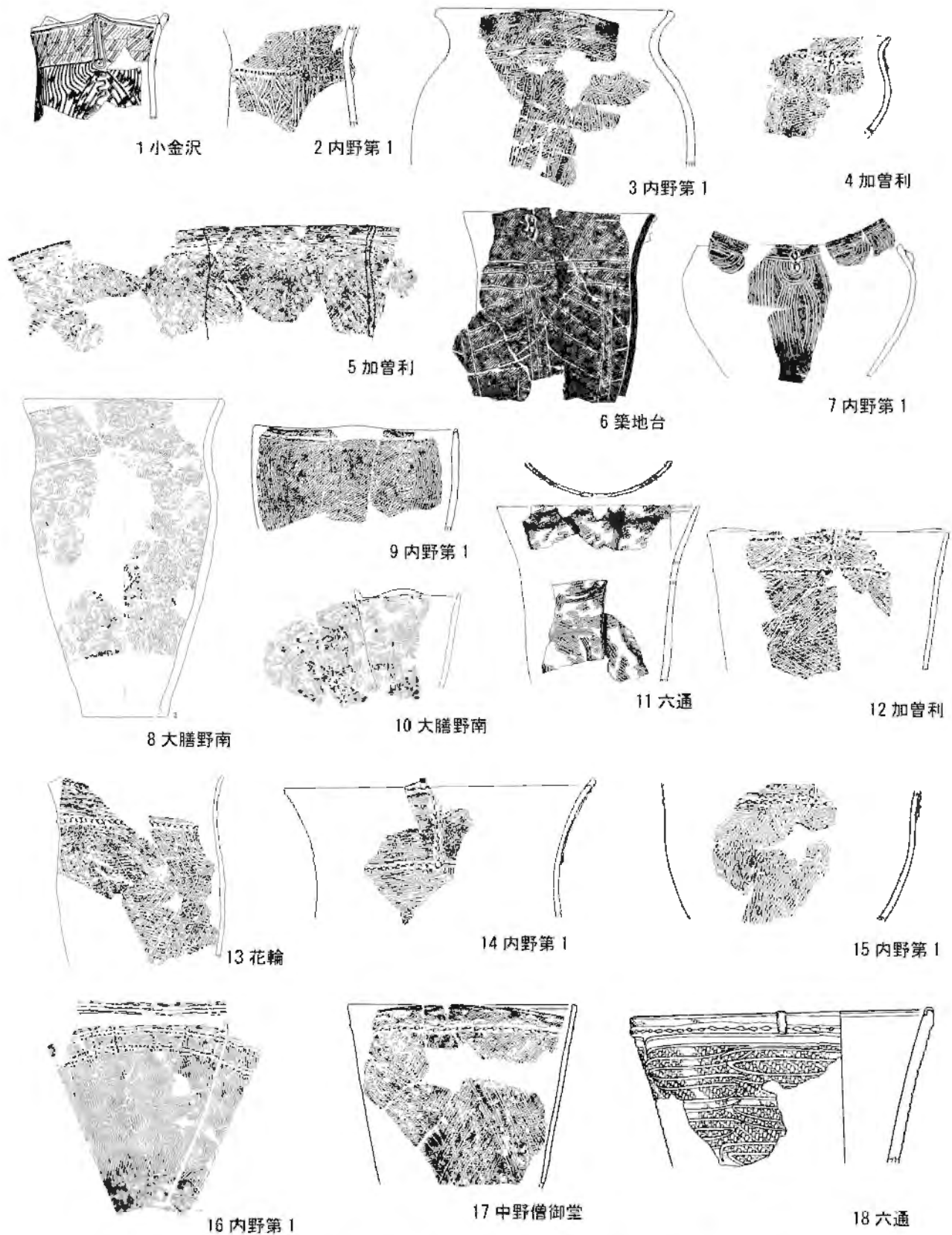
堀之内 2d 式について、石井は、2c 式に比べ文様帯がさらに狭まる点、「内面文の発達」（石井 1984：P22）、連鎖状隆線が 2 条になるものが多い傾向を指摘した（石井 1984）。11、12 は、鉢形土器に文様が施されるものである。口縁内面における内面文の発達が認められる。11 は楕円文と考えられる文様が施されているが、かなりの簡略化が認められる。12 は胴部を欠損するため、文様については不明である。13～16 は、朝顔形深鉢のものである。13 は狭い文様帯に杵状文が施される。口縁部には連鎖状隆線が 2 条貼付けられ、内面文が認められる。堀之内 2e 式に下る可能性がある。4 は対弧文が施される。堀之内 2c 式の可能性もある。口縁部には幅広の突起が付され、突起内部には文様が認められる。15、16 は胴部に一帯の帯縄文が施されるものである。15 は口縁部には連鎖状隆線が 1 条、16 は 2 条貼付けられる。

(5) 堀之内 2e 式（第 3 図下段）

堀之内 2e 式について、石井は、口縁部の内面文、突起の発達を特徴として挙げている（石井 1984）。2e 式について、現状の加曾利 B1 式初頭の土器群研究との関係から、石井論文の段階よりも範囲が広がっていることに注意が必要である。17～20 は浅鉢である。18 をはじめとして内面文の発達が認められる。石井論文の段階ではこれらの土器を堀之内 2e 式と捉えていないが、現在では堀之内 2 式最終末と捉える状況にある。ここでは堀之内 2 式として扱っておく。21～24 は胴部に 1 帯の帯縄文が施される。堀之内 2 式の中頃まで認められた複雑な文様は、ほとんど認められず、単純化している様相が確認できる。21～23 は特徴的な突起が付される。この段階の土器は、加曾利 B1 式への過渡期としてのあり方が確認できる。

(6) 注口土器（第 4 図）

千葉市内における堀之内 2 式の注口土器の集成を行ったが、半完形個体資料として集成できたのが、



第5図 千葉市内で出土した堀之内2式の「伊篠白幡Ⅳ群10類型」土器（縮尺不同）

第 4 図の 4 個体である。破片資料を含めれば若干数量は増えるが、深鉢や鉢形土器に比べ、出土数はかなり限定されており、検討することは出来なかった。

さて堀之内 2 式の注口土器であるが、胴部に帯縄文による文様が施されることが特徴的である。今回注口土器の変遷については検討できず、5 細分の中でどのような土器があるのかは、今後の検討課題としたい。

(7) 伊篠白幡Ⅳ群 10 類型 (第 5 図)

「伊篠白幡Ⅳ群 10 類型」とは大内千年によって呼称が与えられたもので、胴部の文様構成が堀之内 1 式 (石井 D 群) からの変化が認められる土器で、堀之内 2 式に伴う粗製土器を指す (大内 2002)。大内は中沢貝塚出土土器の検討をする上で、類例を提示し型式学的な検討を行い、加曽利 B 式の紐線文系粗製土器の成立に深く関わったと考察した。大内は、当該期の土器群について「堀之内 2 式の粗製の土器が量的には精製土器以上に出土している可能性も高く、この理解なしに東関東の堀之内 2 式の様相は把握できない」 (大内 2002 : P95) とした。

この「伊篠白幡Ⅳ群 10 類型」は、大内が提示したものを見ると、堀之内 2 式でも後半に伴うものに限られている。本来であれば、第 5 図の中でも 12 ~ 18 が該当するものと考えられる。しかし前述の通り、堀之内 1 式からの変化が認められる土器で、堀之内 2 式に伴う粗製土器としてここでは、堀之内 2 式前半段階の土器もこの呼称で扱うこととする。

1 ~ 8 は石井分類の D 群 (石井 1993) に系譜を持つ土器が堀之内 2 式期に下ったものである。1 ~ 4、8 は頸部に縄文が施され、胴部には多重沈線で文様が施される。堀之内 2 式期における特徴として、多重の細い沈線で文様が施される点、文様間も空白部がないように埋めていく傾向が認められる。5、7 は口頸部の文様帯が省略されたものである。6 は文様構成が D 群と同様だが、胴部文様は典型的なものと異なる。文様構成の乱れと捉え、2 式期のものと考えた。9、10、11 は細い多重の沈線で文様が施される。11 は、堀之内 2 式に特徴的な内面に沈線が引かれる。1 ~ 10 は堀之内 2 式でも前半段階に伴うものと考ええる。11 については判然としない。12 ~ 16 は口縁部と胴くびれ部に隆線が貼り付けられ、縄文を地文とし細い多重沈線が施されるものである。12、13、16 は、多重沈線で菱形の文様を、15 は方形の文様が施される。14 は胴部文様の多くが欠損しており不明である。17、18 は朝顔形の器形で口縁部に連鎖状隆線、胴部に縄文と多条の沈線が引かれるものである。17 は斜行する沈線、18 は蛇行する沈線で文様が施されている。

さてここで扱った土器であるが、千葉県内における層位事例は多くない。次に遺構内一括出土例についてみていく。三輪野山貝塚 SI-005 (財千葉県文化財センター 2001) では堀之内 2b 式の土器と 8 に類似した土器が出土しており、堀之内 2 式前半段階にはこうした様相で存在していると考えられる。また南羽鳥花輪内遺跡 (財印旛郡市文化財センター 2008) では堀之内 2d 式と 14、15 に類似した土器が出土しており、堀之内 2 式後半の当該土器群の様相を知ることが出来る。

型式学的な検討、層位事例の検討も甚だ不十分であるが、ここでは 1 ~ 10 が前半、12 ~ 18 が後半の様相としておきたい。

5 おわりに

千葉市内における堀之内 2 式土器の集成を行い、不十分ではあるが検討を行った。堀之内 2a ～ 2e 式まで千葉市内で出土が認められた。また千葉市内における出土の偏差についても述べる事が出来た。型式学的検討は先行研究を踏襲する形で行った。今後は、施される文様の系譜と、どの文様がよく採用されるのか、その個体数量から地域差が示せるのではないかと考えている。堀之内 2 式の粗製土器として堀之内 1 式の顔付をした土器群についても扱い、大まかな時期的な変遷については示せたと考える。

紙幅の関係上、研究史についてほとんど触れることが出来なかった。研究史については、また別稿でまとめることとしたい。また「伊籙白幡Ⅳ群 10 類型」の土器についても、型式学的なヴァリエーションをはじめ、時期的な変遷も含め、まだまだ課題が多い。注口土器についても同様である。これらの検討も、今後の課題としたい。

はじめにでも触れたが、後期の土器製作システムや後期集落の様相を検討する上で、堀之内 2 式土器の研究の持つ意味は大きい。今後も当該期の土器研究を深めて、縄文後期の社会像の復元を目指していきたい。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、石井寛氏、加納実氏には土器の見方や細別時期の特徴、変遷についてご指導いただいた。また当該土器の検討にあたっては、大石崇史氏、長田友也氏、小泉翔太氏、高野紗奈江氏、千葉豊氏、森本隆寛氏にお世話になった。大内千年氏には文献をご教示いただいた。資料集成にあたっては加曽利貝塚博物館の協力を得た。記して感謝申し上げます。

註

- 1 堀之内式土器の研究史の中で 1982 年に市立市川考古博物館が開催した「シンポジウム堀之内式土器」は重要であるが、主として検討されたのは堀之内 1 式であった。この他にも千葉県内の堀之内 2 式を対象とした研究はやはり少ない。また資料蓄積が中々進まなかった状況については、小川和博（小川 1984）、西山太郎（西山 1987）が述べており、「シンポジウム堀之内式土器」の中でも触れられている。
- 2 阿部芳郎は、堀之内 2 式の成立について、磨消縄文による文様表出技法の出現と考えている（阿部 1998）。このことから阿部は、堀之内 2 式の成立を、石井より 1 段階下と捉えている。

参考文献

- 阿部芳郎 1998 「堀之内 2 式土器の構成と地域性—下総台地における堀之内 2 式土器成立期の様相—」『縄文時代』第 9 号、縄文時代文化研究会
- 石井 寛 1984 「堀之内 2 式土器の研究（予察）」『調査研究集録』第 5 冊、港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 石井 寛 1993 「1. 堀之内 1 式土器群に関する問題」『牛ヶ谷遺跡・華蔵台南遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 XIV、横浜市ふるさと歴史財団
- 石井 寛 1995 「原出口遺跡 20 号住居址出土土器群をめぐって」『川和向原遺跡・原出口遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 XIX、横浜市ふるさと歴史財団
- （財）印旛郡市文化財センター 2008 『南羽鳥花輪内遺跡—南羽鳥集会所建設に伴う埋蔵文化財調査—』印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第 258 集

大内千年 2002 「都立小松川高校所在の中沢貝塚出土土器について」『鎌ヶ谷市史研究』第 15 号、鎌ヶ谷市教育委員会

小川和博 1984 「堀之内 2 式土器編年の課題－東関東地方を中心として－」『奈和』特別号、奈和同人会

鈴木徳雄 1983 「3. 南関東東部」『シンポジウム堀之内式土器』市立市川考古博物館

(財)千葉県文化財センター 2001 『主要地方道松戸野田線住宅地関連埋蔵文化財調査報告書－流山市三輪野山貝塚・宮前・道六神・八幡前－』千葉県文化財センター発掘調査報告書第 399 集

西山太郎 1987 「栗山川流域の堀之内式土器－縄文土器の地域的あり方－」『竹筧』第 2 号、北総たけべらの会

第 1 表 千葉市堀之内 2 式集成遺跡表

遺跡No	遺跡名	遺構名等	文献No.	2a	2b	2c	2d	2e	注口	伊篠白幡IV群10類型
1	築地貝塚	包含層	1		○	○	○			○
2	内野第1遺跡	8エリアJ-19号住居	2		○					
		9エリアJ-20号住居			○					○
		9エリアJ-21号住居		○			○			
		18エリアJ-34号住居			○					
		19エリア包含層		○	○					
		20エリアJ-39号住居		○	○					○
		20エリアJ-40号住居								○
		28エリアJ-54号住居		○						
		28エリア包含層								○
		31エリアJ-56号住居					○	○		
		31エリアJ-57号住居						○		○
		31エリア包含層		○	○	○	○			○
		32エリアJ-61号住居			○					○
		33エリアJ-62号住居		○	○			○		○
		33エリアJ-63号住居								○
		33エリアJ-64号住居					○			
		33エリア包含層						○		
		46エリア包含層		○						
		53エリアJ-88号住居				○				
		53エリアJ-89・90・91号住居		○				○		
		53エリア包含層				○				
3	小中台A遺跡	6号住居	3	○						
4	園生貝塚	第4トレンチ	4							○
5	東寺山石神遺跡	包含層	5	○						
6	草刈場貝塚	A地点	6			○				○
7	台門貝塚	B地点Ⅱ区	6	○						
8	加曽利貝塚	1-1区	7	○						○
		3区Cトレンチ							○	
		I トレンチ17グリッド		○						
		I トレンチ		○	○	○	○			○
		Ⅲ トレンチ				○	○	○		○
		Ⅳ トレンチ								○
		Ⅴ トレンチ			○	○	○			○
9	花輪貝塚	第2調査区	8				○			
		F-5貝層			○					
		F-6			○					
		J-5		○		○				○
		M-11			○					○

遺跡No	遺跡名	遺構名等	文献No.	2a	2b	2c	2d	2e	注口	伊篠白幡IV群10類型
10	矢作貝塚	012住居跡	9		○					
		013・014住居跡		○		○	○			○
		包含層	10		○		○			
		表面採集資料	11			○		○		
		包含層	12					○		
11	築地台貝塚	包含層	13	○	○	○				○
12	上赤塚遺跡	貝塚内側地点	14		○					
		東側尾根		○						
13	木戸作遺跡	32(046)号跡	15	○						
		33(047)号跡								○
		第1貝塚								○
		第2貝塚		○	○	○	○	○		○
		第3貝塚		○						
		第4貝塚		○	○	○		○	○	○
		第6貝塚				○				○
		第7貝塚		○			○			○
14	小金沢貝塚	3(120)号跡	16	○						
		19(152)号跡			○					
		貝層			○					
15	六通貝塚	主貝層西端部	17							○
		主貝層北端部								○
		北部A区								○
		北部B区								○
16	バクチ穴遺跡	包含層	18		○					
17	大膳野南貝塚	J11号住居	19		○					○
		J25号住居				○	○		○	○
		J30号住居		○			○	○		○
		J31号住居				○				
		J40号住居				○				
		J63号住居			○					
		J67号住居			○					
		J78号住居			○					
		J81号住居				○				○
		J110号住居			○					
		154号土坑		○						○
		167号土坑			○					
		181号土坑						○		
		193号土坑							○	
		243号土坑								○
		6号屋外漆喰炉		○						
		包含層		○	○	○				
18	芳賀輪遺跡	包含層	20						○	
		25・26号住居	21							○
		包含層								○
19	中野僧御堂遺跡	包含層	22	○	○	○			○	○

2021 年 3 月

第 2 表 千葉市内における堀之内 2 式土器出土報告書集成

遺跡名	遺跡No	文献No	編集機関	出版年	報告書名	シリーズ名
築地貝塚	1	1	滝口宏	1961	『印旛手賀—印旛手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査—』	早稲田大学考古学研究室報告第8冊
内野第1遺跡	2	2	千葉市文化財調査協会	2001	『千葉市内野第1遺跡発掘調査報告書』	
小中台A遺跡	3	3	千葉市文化財調査協会	1997	『千葉市小中台A遺跡・牛尾外遺跡』	
園生貝塚	4	4	千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センター	2010	『千葉市園生貝塚—平成19・20年度発掘調査報告書—』	
東寺山石神遺跡	5	5	千葉県文化財センター	1977	『千葉市東寺山石神遺跡』	
草刈場貝塚	6	6	千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センター	2008	『千葉市台門貝塚—平成17・18年度発掘調査報告書—』	
台門貝塚	7	6				
加曽利貝塚	8	7	千葉市教育委員会	2017	『史跡 加曽利貝塚総括報告書』	
花輪貝塚	9	8	千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センター	2006	『千葉市花輪貝塚—平成15年度確認調査報告—』	
矢作貝塚	10	9	千葉県文化財センター	1981	『千葉県千葉市矢作貝塚』	
		10	千葉県文化財センター	1994	『千葉市矢作貝塚Ⅱ—千葉浄水場内連絡管敷設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書—』	千葉県文化財センター調査報告第252集
		11	別所鮎実	2019	『「助川資料」における千葉市矢作貝塚出土土器』	『考古学集刊』第15号
		12	千葉県史料研究財団	2004	『千葉県の歴史 資料編 考古4(遺跡・遺構・遺物)』	
築地台貝塚	11	13	千葉県文化財センター	1978	『千葉市築地台貝塚・平山古墳—千葉東金道路建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告2—(千葉市平山地区)』	
上赤塚遺跡	12	14	千葉県文化財センター	2005	『千葉東南部ニュータウン31—千葉市ムコアラク遺跡2・ムコアラク10号墳・上赤塚遺跡—』	千葉県文化財センター調査報告第513集
木戸作遺跡	13	15	千葉県文化財センター	1979	『千葉東南部ニュータウン7—木戸作遺跡(第2次)—』	
小金沢貝塚	14	16	千葉県文化財センター	1982	『千葉東南部ニュータウン10—小金沢貝塚—』	
六通貝塚	15	17	千葉県教育振興財団文化財センター	2007	『千葉東南部ニュータウン37—千葉市六通貝塚—』	千葉県教育振興財団調査報告第572集
バクチ穴遺跡	16	18	千葉県文化財センター	1983	『千葉東南部ニュータウン14—バクチ穴遺跡・有吉遺跡(第3次)・有吉南遺跡—』	
大膳野南貝塚	17	19	千葉市教育振興財団・国際文化財株式会社・玉川文化財研究所共同企業体	2014	『千葉市大膳野南貝塚発掘調査報告書』	
芳賀輪遺跡	18	20	千葉市文化財調査協会	1987	『芳賀輪遺跡・太田アラク遺跡』	
		21	千葉市教育委員会・千葉市教育振興財団	2007	『千葉市芳賀輪遺跡』	
中野僧御堂遺跡	19	22	千葉県文化財センター	1976	『中野僧御堂遺跡—千葉東金道路建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告1—(千葉市中野区)』	